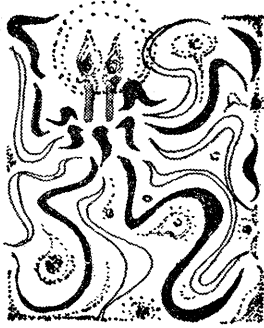


若いお母さんたちへ

がんばれ三組——

母さんたちの応援歌



はるにれの会

友定啓子

一九八五年は私にとって思いがけない豊かな年になった。いま私の子どもは小学三年と一年になった。わが子が幼児時代を終えてしまったことは、私にとって少なからず残念な事であったけれど、小学生時代もまた親という立場で紡ぎだすものがあるということ、この一年間で学んだような気がする。

昨年の七月、夏休みを目前にした保護者会で二年二組の親たちは驚いてしまった。先生から一つの事件が報告されたからである。「一人の女の子に二十人の男子がかかっていた」というのである。そのことをめぐるさまざまな論議の末、一人の母親から「こんなふうにかか事がおこらないと、そのまま一日一日が過ぎ

ていってしまふ。それでは何だかこわいような気がする。月に一度でもみんな話し合える場がほしい」という意見が出て、むずかしいかも知れないけれど、希望者だけでもいいからやってみようということになり、その場で四人の世話人が選ばれ、その中の一人に私も入っていた。

世話人がまず一致したことは、「夏休みの最後の日曜日に、親子が遊ぼう」ということだった。その時、私は以前からウォークラリーというものをやってみたいと思っていたので、それをやってみようと言った。しかし、私思うと、このウォークラリーの一言があんなについてまわるとは思わなかった。平凡にカレー炊飯ぐらいにしておけば、事態もまた変わっていたと思う。私も無謀と楽天性を旨とする人間なので、ウォークラリーの一つや二つなんとかなると思ひ、まずその道の権威をさがし求め、市内の高校の体育の先生に教えを乞うた。どうも聞いていると本式のウォークラリーは地図を使う、おまけにコース設定に相当の経験がいるらしい……。ウーン、

と思わずうなった。二年生は地図が読めない、それどころか、東西南北もわからない、状況によっては左右も間違えるわけだから、これはたいへんだ……。ただ、要するに、ある一定のコースをタイズを解きながら目的地に着けばよいということだけは納得した。その主旨にそって二年生版をつくれればいいわけだ。さいわいなことに（？）、誰も本式のウォークラリーを知らないので、大胆にアレンジすることに何の抵抗もない。地図は文章に置きかえ、左右だけを使って、コースを二年生の体力と知力に合わせて設定することにし、先生に左右の特訓だけをお願いして、ラリーのことは私にまかせて下さいと安うけあいをして、結局、九月一日に「ウォークラリーとカレーライスのつどい」をやることに決定した。クラスの子どもたちが、グループで協力しながら楽しく一日を過ごせるように、同時に、親は我が子だけでなく他の子どもたちの姿、あるいは子どもたちの関係を見ることによつて、視野を広げられるようにという願いをこめてである。このお知らせプリントは、『がんばれ！ 3組、第

一号」と名付けられ、三月までの間に計五〇ページも発行され、親と子と先生の間をつなぐ役割を果たした。

それからがたいへん、世話人グループは出席確認、親の役割分担、カレーの材料調達、道具調達、コースの設定、下見、クイズづくり、指示文づくり、安全体制の確認、そして数人の子どもを呼んでのリハーサルとまあ忙しく活気のある夏休みになった。世話人たちはお互に知らない人達であったし、大人数の行事を用意するのははじめてで（何しろ出席をとったら一〇〇名をこえてしまい、驚き、喜び、かつ、おののきつつ）、いろいろと準備の段階でももしろいことがあった。

ラリーのコースは、学校から四キロほど先の山の中腹を最終目的として、二つの神社と一つのお寺をまわりながら、クイズをといっていく。八月中旬に子ども五人と親四人で時間を測定してみる。時間、コースに大きな問題はなかったが、子どもたちは思わぬところでとまどった。学校から北上して、東西に走るバイパスの地下道をくぐって地上に出た時、方向を失ってしまった。「まっ

すぐ行くと『朝倉』というバスていがあります」という

指示文だったのだが、地上に出たとたん、広いバイパスの方向にむいてしまい、おまけにそこにバス停が見えたものだから、リーダー格が「あっちだ！」と叫んだ時には、他の子どもたちがドドドッとそれについて行ってしまった。バス停の前で首をかしげている。バス停の名前が違うのである。すると、それまで静かにしていた五年生のお姉さんが、「あっちから歩いてきたのだから、まっすぐというのはこっちではない」と言い出してやっと軌道修正された。私達はそれを見て、「親は後ろからついていくが口は出さない」という約束を「十分間は口を出さない」ということに変えた。また、バス停の裏に回ってキョロキョロしているの、どうしたのかなと思っていると、バス停の名前がどこに書いてあるのかわからず、さがしていたのであった。この子たちにとって、自分の判断で町を歩くことは珍しいことのようにだ。

さて、カレーの方だが、これも子どもたちと一緒に作ると楽しいのだが、一日の行事に二つの内容をもりこむ

のは難しいという意見から、今回は親が作ることにし、百人分のごはんを炊く練習をしなければならぬ。幼児もいるので八升としてどうやって炊くか、五升と三升のカマとカマドをなんとか調達して、これまた集まれる人だけ集まって炊いてみた。結果は、上はまあまあ、下はまっ黒、中はカチカチという炒飯専用ができてしまった。量が多すぎて熱が均等に伝わらない。昔の人は一体どうして炊いたのだろう……とカマを前にしてふしぎだった。それでも、本番には少し火加減を注意すればなんとかなるでしょうということになり、できそこないの大量のご飯を譲り合いつつみんなで分けて持って帰った。

あれやこれやと大きわざをして、九月一日を迎えたのだが、なんと、いくら二百十日だからといっても、三つの台風が一べんに来てしまったのだ。前日、二つの台風をやりすごしてのくもり空、三つ目が来るというニュースを前にして、いくらなんでも決行できない。朝、無念の中止連絡をした。

二学期は始まったが、こんなに準備したことをすてて

おくわけにもいかず、百名の期待をせおって(?) 九月十六日に延期、再びお知らせプリント、出席確認と動き出し、「また、雨が降ったらどうしよう?」……みんな下を向いてしまった。その時は、ゲーム大会とカレーにしようということにして、準備を進めた。しかし、どうも気になるのはご飯のこと、楽しみのカレーがカチカチご飯だったら……と思うと心配になり、再び、ご飯炊きの練習。今度は、調理の先生に相談して、「お湯炊き」という方法を教えてもらった。半信半疑ながら、分量のお湯を沸かして、そこへ一気にお米をあげ、かき回して炊く。結果はバッチリ! 内部までちゃんと炊けた。よかった、よかった、これでみんなに食べさせられると喜んでるか……。やっぱりもらってくれそうな人達の家を回って配って歩いた。この時のことは今でも「白い恐怖」と語り草になっている。おかげで、私達は大量のご飯炊きにはガゼン自信を持って、本番よ早くこいという気分だった。

しかし、前日の天気予報は「くもり、ところにより雨」。ウーン、だいたい山口に十年住んで、こういう天気予報の時は、そのところに入って雨が降ることが多いことがわかっている。前日集まったみんなはくもり空を見上げては、ため息。結局、晴れた場合と降った場合の二つの用意をすることになった。ゲームの方は全く用意していないので、急ぎょ二、三冊のゲームの本を持ち寄って、グループで協力しなければならぬもの、個人の力量が勝敗に結びつかないもの、お互いに親しくなれるものという基本線を出してプログラムを組んだ。夜、あまり布を持ち出し、ハチマキを作りながら、私の頭の中は晴れたらこう動いて、降ったらこうなって、という段どりぐるぐるとうず巻き、ハレツシそうであった。

そして翌朝、雨の音で目が覚めた。早朝、世話人たちは、電話で「がんばろうね」「もうヤケだ!」と落ち込みそうなところを励まし合って会場に向かう。それでも、中止にして窓から外の雨をながめているよりはマシであった。時刻になり、雨の中次々と親子が、小学校の

講堂に集まり、親たちはカレー係とゲーム参加に二手にわかれて動き始めた。ご飯は、電気ガマで炊いたものを百人分集めた。講堂では、ゲームのつどい。進行、くり出し、採点など、一夜漬けのプログラムにあたふたとかけずり回る世話人達を見かねて次々と手伝いが出現した。

ぼくが、いちばんたのしかったのは、クイズでか
いものがたのしかった。クイズのヒントは、めっちゃ
くちゃだった。ぼくは、さいしょ、わからなかった。
なんかいもよみなおして、やっとクイズがとけた。
答えがわかった。答えは、ピンク色のボール。いそ
いで、ピンク色のボールをとりに行った。でも、に
んさんぎゃくをしていたから、こけそうになっ
た。

きのう、おや子ゲームで一ばんおもしろかったの
は、しんぶんしじょうです。しんぶんをはんぶん

おっぺおいて、そのうえにのるのです。

せんせい、いもうとのみかをかたぐるまして、わたしをおんぶして、さいごには、ちずさんをあきえださんのおねえちゃんがかたぐるまをして、それを、せんせい、だっこしました。すごいばかぢからでしたんだ。これこそ、かじばのばかぢからだ！

しんぶんしが、八ぶんの一になった。一番になった。すごかった。

というわけでゲーム大会は、最後には、子どもたちが進行役を「もう一回コール」とりかこむシーンも出て終了した。

しかし、子どもたちはウォークラリーを楽しみにしています、と先生からも言われるし、他の親からも出るラリーをやらぬことには私達世話人はやめられないような状況であった。が、ここらでちょっとひとやすみ。十月は、先生を囲んで懇談会。自由参加で十五人の出席で、日頃の子どもの様子を報告し合った。

そして、十一月四日、悲願のウォークラリーが実現した。晴れてくれただけでうれしかった。とは言え、全くの初体験で、私はタイム係として一グループづつスタートさせながら、無事に行ってくれるように、と祈るような思いだった。

日曜日の九時半、学校を出ました。はじめのクイズは、学校にあるくすの木のことでした。つぎは、バスのちかどうの出口のかいだんをかぞえるのでした。三十六だんありました。つぎのクイズは、じんじやにいて、犬のもんだいでした。二ひきとも口をあけているか。二ひきとも口をとじているか。一ひきはあけて、一ひきはとじているかでした。こたえは三の一ひきはあけて、一ひきはとじていました。それからめがねのみきをすぎてきどじんじやにつききました。おちゃとあめをたべて、五分間休けい。そして山をのぼっていききました。そして、八ばん目のたてふだになんとかいてあるかでした。

れんきゅう、きょうは、とつてもおもしろかった。ウォークラリー、たのしかったよ。ゲームがおもしろかった。どっちぼうるのなげるのがおもしろかったよ。カレーおいしかった。カレーだいすき。かえるとき、学校までくるまにのせてもらった。おもしろかったウォークラリー。

待ちに待ったウォークラリーは朝の内は冷え込みましたが良いお天気でした。引率をした時の様子は、男女共に仲良くとはいかなかったのですが（男の子はてれ屋なところが出ていたのか、なかなか顔を合わせて絵を見ていなかった）、長い道のりを目的に向って進みました。久し振りに親の私達も歩くことを体験し、お話をしながら、少しはよそのお母さんと近くなったようです。おいしいカレーを作るためにお母さん達の力を一つに合わせ、本当に「母の味」が出来ました。コーヒータム、子どもたち

はお父さん、先生にまかせっきりで、色んなお話をしながら、この会に参加するうちに、回を重ねて、こんなにお母さん同士も仲良くできて、良かったと思います。参観だけでは、こんな風に色んな話は出ないし。良い集いがありました。

当日、終わって家に帰ってつい口に出るのが、「あー、終わった！ 終わってよかったー。」実はこの日、私の三十ウン回目の誕生日だった。私は娘やその友達から誕生日カードをもらった。「おぼちゃん、ウォークラリー終わってよかったね。カゼひかない、じょうぶな親になってね。」

さて終われば終わったで打ち上げがいる。子持ち故、日を改めて十五人程集まった。二次会でカラオケなど楽しみ、ついでにボトルまでできてしまった。そしてその後、今度は世話人を慰労する会を開こうと別のお母さん達がアツと言う間に呼びかけ、またまた食べる会が開催され、私達は、桜草の鉢植をもらった。そんなわけで、

二学期の最後の保護者会は親しみが増して、自分の子ども様子などざっくりぼらんに話せるようになって、色んな討論ができた。はじめに提案していた、お母さんの望んだことが実現したのだ。そして三月のお別れ会には、親も何かやろうということになり、その日、インスタントママさんコーラスが出現した。

こうして書いてみると、まあ、よくやったと自分でもあきれる。でも、こうしようと思っていたのではなく、その時々々の展開にまかせたままだったのだが、世話人四人プラス役員二人、みんな個性的で（全然似ていない）自然に補い合う形で動くようになったことが体験してとてもよかった。Aさんはガンのおじいちゃんと同居で、この間に亡くなられたし、Bさんは先天性の内臓障害を持っていたし、Cさんは息子さんが入院、Dさんは他の世話をたくさん引き受けていたし、私やCさんは仕事持ちだった。それぞれにしんどかったのに（から？）集まることで、力が出せたという気がする。言うまでもなくこの楽天的な母さんパワーに見事、こたえて下さった先生

がいる。そう、一番しんどかったのは先生である。なぜならその後も、子どもたちは様々な失敗をくり返し、その都度、手当てに歩いて下さった。親が仲良くなっただけで子どもたちがよくなる、と単純には言えないし、まだまだ肝心のところまで、手が届いていないのだが、ただわかっていてることの一つは、私達親が一番ほしいのは、子どもたちに何かあった時、一緒に悩み、助け合える人間関係だということである。

そして今、クラスは離ればなれになり、新しい学年へと進んだ。しかし、この人間関係の輪が根づかせ、広げることをもと三組の母さん達は約束し合っている。